

上ヶ原の防災士になる： 27年来の宿題

経済と人間

2022年6月23日

本郷 亮 教授

(経済学史)

私は21年秋から約半年間、「ひょうご防災リーダー講座」（詳しくはネットを検索を。以下「リーダー講座」と略す）を受講し、22年春、防災士の資格を取得し、県防災士会の会員になった。試験自体は楽勝だったが、受験するには所定の研修（講義と実習）が必要で、それが大変であり、また楽しくもあった。

リーダー講座は全12回のコース。毎回、土曜に三木市の県広域防災センターで朝から夕方までやる。家から通う移動も含めると、丸一日つぶれるわけだ。オートバイ・登山・狩猟など多趣味な私が貴重な週末の休みを12回も費やすのだから、その熱意のほどは察して頂けよう。リーダー講座の最終日に防災士の資格試験を受けると同時に、修了者は地域の防災リーダーとして自治体（私は西宮市）に登録され、非常時には自治体から出動を求められる仕組みになっている。特に避難所の設置・運営は重要。このようにリーダー講座は、地域を支える人材を養成する制度なので、受講料・テキスト代、交通費・受験料など、すべて実質無料だ。

非常時には防災リーダーたちが即座に力を合わせる必要があるため、研修段階から居住エリアごとに班分け

され、顔見知りの関係を築くように求められる。おかげで市内に、学校教員や町会役員などの知人が増えた。防災士飲み会を通じて、こうした地元ネットワークを今も維持している（笑）。

なぜ防災に関心をもったのか？ 原点は阪神淡路大震災だ。私が関学経済学部4年生のとき、卒業間近の95年1月17日5時46分。私は大阪に住んでいたが、居ても立ってもいられず、4日後の21日、西宮北口駅から瓦礫の間を歩いて大学にきた。特に目的があつて来たわけではなかった。たまたま吉岡記念館前でボランティア募集の看板を見て、衝動的にその建物に入った。写真はこの「関西学院救援ボランティア」結成初日の21日のもの。真ん中が私だ（神戸新聞01年2月8日夕刊）。避難所の小学校へ行ってガラスの破片を掃除したり、支援物資を届けたりした。大学に泊まり込む夜もあったが、さすがに厳冬期は辛く、風邪で一週間近く寝込みもした。そんなこんなで一カ月もすると、登録ボランティアは二千人を越え、いわゆる「ボランティア元年」の代表事例の1つとしてメディアから注目されるようになる。フラットな組織がピラミッド型組織になるにつれ、私の考えすぎか

もしれないが、内部で権力闘争のようなものも生じた。しかし今思えば、当時の私のような素人の学生にできるボランティアはたかが知れていた。未熟だった。反省点ばかりだ。あれから四半世紀以上が経ち、私は上ヶ原に住む関学教員の役割とは何だろうかと自問するなかで、防災をあらためて学ぼうと思った。地震、津波、土砂災害、水害、それから戦争のような人災。皆さんは、そのときどう行動しますか？ 愛する人々を守れますか？ 電気・ガス・水道が少し止まるだけでも私たちの暮らしは案外もろいのです。こうした弱さを自覚することが、防災の最初の一步です。



救援ボランティア委員会の初日、宗教センターに集まった学生、教員ら
＝1995年1月（立木茂雄さん提供）